

藤原健ゼミナール

個人と社会の両側面から対人行動を読み解く

藤原ゼミは、心理学という学問の中でも「個人」と「社会」の絡み合いという視点にたつて（こういう分野のことを社会心理学といいます）、人の様々な社会行動について考えていくゼミです。二〇一四年度から始まったピ

カピカの新ゼミなのですが、一期生となるゼミ生たちと楽しいゼミ・ライフを送っています。ここでは、そんな藤原ゼミの一年間の足跡を振り返ってみたいと思います。

一・毎週のゼミ

前期は基本的には英語の文献（本や論文）を読み、資料にまとめたうえで発表してもらいました。心理学はまだまだ欧米圏の知見が最新のものとなる場合が多いこと

もあり、どうせ読むなら本物を、ということでも英語の文献にチャレンジしてもらおうことにしています。

後期は自分の興味のあるテーマについて自分で文献を調べ、発表してもらいました。今年は「社会的手抜き」や「傍観者効果」といったやや固めのテーマから、「思い込みの力」、「魅力の高め方」など、日常生活の中でも親しみやすいテーマの発表もありました。それぞれの発表に対してはゼミ生同士での質問時間を設けており、聞かれたことに的確に答える練習をしたり、そこで新たな発見をしたりなど、ゼミのみんなで考える時間を大切にしました。

二・イチ押し！報告

これは、プレゼンテーションに慣れてもらう一環で一年を通じてやりました。ゼミの時間は毎回一時間半なのですが、その最後五分くらいを使つて誰か一人（当番制）が今のイチ押しを発表します。これを毎週繰り返して、最後の週には月間チャンピオンを全員の投票で決めます。そして、月間チャンピオンに選ばれた内容について、ゼミのみんなで体験に行きます。今年はラーメンやパンケーキをみんなで食べに行ったり、映画を観たりしました。他にも、ファミリーストランに行つて特注の裏メニューを頼む、なんてこともしました。先生も大好きな海外ドラマを紹介してみたのですが、チャンピオンにはなれませんでした（うーん、残念）。あとは小説やバンド、ゲームのイチ押しがあったり、「江坂」なんていう土地のイチ押しもありました。ゼミ生たちの生の声なので、学生がどんなことに興味をもち、何を考えて生活しているのかに触れることが分かるので、先生としても非常に楽しみな時間です。次こそは、先生自身のイチ押しもチャンピオンになりたいものです。

三、学生奨学論文にチャレンジ

大阪経済大学には学生奨学論文という、いつてみれば論文コンテストがあります。実際に研究をするとはどういうことか、文章を書くとはどういうことか（正しいか）に難しいことか）を体験してもらうために、ゼミ生みんなで一編の論文を仕上げて奨学論文に投稿しました。夏休みに入る前からアイデア出しを行つて研究の方向性を定め、夏休み期間の一週間を使つてゼミ生みんなで心齋橋に観察実験をしに行きました。今回のテーマは「人の親切」で、ターゲットにしたのは「道を教えてもらう」という行動でした。具体的な話し合いを進めていく中で、歩きスマホをしている人に道を尋ねてみるとどうなるかを検証することになりました。結果は、（先生としても興味深いことに）歩きスマホをしている人は道を聞くと答えてはくれるのですが、その人が教えてくれた道は目的地にたどり着かない道である確率がとても高いことが分かりました。つまり、厄介払いでもされたのでしょうか、間違つた道を適当に教えられていたのです。人と人をつなぐための機械であるスマホが、目の前の人とのコミュニケーションを台無しにするなんて、何とも皮肉な結果です。この結果を論文にして投稿した結果、見事佳

作を受賞することができました。夏休みに集まるのは大変なことでしたが、実際に一つの論文を仕上げていく中でゼミ内での一体感が非常に高まったと思います。

四. ゼミ旅行

夏休みには心齋橋での観察実験だけでなく、ゼミ旅行にも行きました。今年は九月の中旬に日程を定めて、直島に行ってきました。場所の決定からスケジューリングまで、全てゼミ生主体で計画してもらいました。予定していたところに急遽行けなくなったりというハプニングもありましたが、それも旅の醍醐味です。みんなで次の案を考えて、結果的には充実した時間を過ごすことができました。どんな旅行になるのかと当初はミステリー・ツアーに参加するような心持ちでしたが、先生自身もとっても楽しめた旅行となりました。

五. いざ、卒論へ

そんなこんなで一年間を過ごしてきた藤原ゼミ一期生



ゼミ旅行で行った直島

ですが、年度が終わる頃には卒業論文の方向性を決めると共に、就職活動が本格化してきます。藤原ゼミでの卒業論文は基本的には実験的手法をベースに、必要であれば調査手法や公開データの二次分析という手法を組み合わせていくことになります。参考となる文献を読んでもらったうえで、先生と二人三脚で研究計画を立てていきます。ここでの工夫として、個別に「二〇一五年年間スケジュール」を作ってもらいました。就職活動や公務員試験の受験などは学生によって様々な展開が予想されるのですが、年間スケジュールを作っておくことで、いつ頃の時期が卒業論文に集中できるのかを先生も学生も把握できるという仕組みです。これにより、お互いに無理な計画を押し付け合ったりしなくて済みます。それぞれが社会に出ていく際に思うような自分になっていられるよう、先生としてもサポートしたいと考えています。

このように一年間を振り返ってみると、中々に面白い一年だったと思います。少なくとも先生は、毎週のゼミの時間を楽しみにしながら一年を過ごすことができました。今は三回生しかいませんが、年度が変わって彼らが

四回生になり、次に入ってくる三回生を合わせて初めて藤原ゼミが一つの形となっていくます。大所帯にはなりませんが、初志貫徹。藤原ゼミが始まるにあたって決めたモットーを大切に、これからの藤原ゼミも明るく前向きに進んでいけたらと思っています。そのモットーを紹介すること、このゼミ紹介を締め括りたいと思います。

〈藤原ゼミのモットー〉

一、感じるんじゃない、考えるんだ！

藤原ゼミは大学というアカデミアの中に存在します。なので、考えることを至上の営みとします。なぜ、どのように、いつ、といった背景を考え、物事を深く理解し、説明していくことを推奨します。思考は自由に、抽象的に、客観的に。

二、ワクワクを恐れるな

アインシュタインはかつて「好奇心はそれだけで存在意義をもつ」といいました。藤原ゼミでは、勉強や研究に限らず、大学生活の全てにおけるワクワクを共有することを念頭においています。

三、一生懸命を恥ずかしがらない、でも、一生懸命だ

けが全てじゃない

(人間科学部講師)

一生懸命になれるということは素晴らしいことです。ですが、一生懸命になることで逆に空回ってしまう人もいます。そんな人は、冷静に計画を立てて物事を進めた方がよいと考えます。どうやったら自分はパフォーマンスが高くなるのかという視点を大切にします。

四、全ての人を尊重せよ

「学び」の前では全ての人が平等です。いつでも誰であつても発言は推奨されます。知識や技術に秀でたものは、惜しげもなく与えるものとします。なぜなら、仲間が面白くなるのが自分の成長につながるから。そして、知識や技術に劣るものは、恥じることなく喜ぶべきとします。なぜなら、今後の成長の可能性が具体的に現れているから。

五、世界に目を向けよ

大経大は狭い？ いやいや、日本だつて十分狭い。広く目を向けるなら何も国内である必要はありません。職場だつて海外でもいいはず。多様な人生経験は自分だけの宝物。世界中の人とコミュニケーションするために、英語の勉強と利用を推奨します。